

横浜ユーラシア文化館開館 20 周年記念シンポジウム 「東アジアの帯金具と古代の日本」講演録

講演 2

渤海の花文帯金具について

講師 小嶋 芳孝*

はじめに

今日はこれから、渤海でどのような花柄のデザインの帯金具が出土しているかということをご紹介しますと思っています。

まず最初に、私と穴太遺跡の帯金具との出会いを簡単にご紹介します。去年の5月頃と思うんですが、京都の国立博物館に勤務されていた久保智康先生から、「穴太遺跡からこんな帯金具が出たけど、同じデザインの帯金具を知ってるか」というメールをいただいて、添付してあった写真をダウンロードして開けてびっくりしました。私が住んでいる金沢で渤海の可能性のある、花柄の文様のある帯金具が出土した時に、花文帯金具を集成したことがあるんです。その時に韓国の濟州島の龍潭洞という遺跡で、金沢で出たものとはデザインが違うんですが、やはり花の文様のある帯金具が出ているとことを知りました。久保さんから届いた写真を開くと、まったく同じデザインの帯金具がパソコンのモニターに出てきたんですね。それでびっくりしまして、久保さんに出土した状況とか、どこへ行ったら見られるのかななどを尋ね、久保さんから岡田さんを紹介していただいて、去年の6月に、渤海を研究している仲間たちと一緒に見せてもらいました。そういうご縁がありまして、新聞発表された時に少しコメントをさせていただいたということと、それから今年の9月に岡田さんと、日本大学の山本孝文先生のお世話で、濟州島まで行って龍潭洞遺跡の帯金具を実際に見ることができました。今日はそのあたりの話も含めてご紹介したいと思います。

今日のお話の趣旨は、渤海から出た帯金具全般に

ついてまずご紹介をしたいと思っています。渤海というのは、698年から926年まで200年ちょっと続いた国です。日本の国内で、渤海から持ってきた可能性のある帯金具というのは実は3点、花柄のあるものが出ていまして、一つは金沢市にある畝田ナベタ遺跡(図6上)、もう一つは群馬県の前橋市にある鳥羽遺跡から畝田ナベタ遺跡の花文帯金具と、大きさも含めてほとんど同じデザインのものが出ています(図6下)。それと、今ご紹介があった大津市の穴太遺跡の資料(岡田講演図5)、この3点です。穴太遺跡の花文帯金具は濟州島の龍潭洞遺跡の帯金具と同じデザインだということが判明したので、これら二種類の花文帯金具の系譜について考えていることをご紹介しますと思っています。

1 渤海の建国と領域

まず渤海について簡単にご説明します。7世紀の終わり頃に唐の營州、現在の遼寧省の朝陽市ですが、モンゴル高原から続いてくる草原地帯と北京周辺の農耕地帯の接点になる場所です。そこには、北方民族の靺鞨人と高句麗人が住んでいました。彼らと同じく營州に住んでいた契丹人が、7世紀末に反乱を起こすようになります。その反乱に乗じて、大祚榮と乞乞仲象(きつきつちゅうしょう)、乞四比羽(きつしひう)が人々を率いて營州から脱出して、東へ逃亡します。その頃、唐は則天武後の時期でして、則天武後はすぐに追撃軍を派遣しますが、大祚榮たちは追撃軍に打ち勝って、東牟山(とうぼうさん)という所で振(震)という国を樹立します。振を樹立した場所について、従来の研究では吉林省敦化市の周辺と言われてきましたが、最近の研究では北朝鮮と中国の国境を流れている図們江(ともんこう)の下流域が渤海建国の場所だという説が提起されています。

*KOJIMA Yoshitaka 金沢学院大学名誉教授 / 金沢大学古代文明・文化資源学研究所客員教授

則天武後の追撃軍を撃退して振という国を樹立した大祚榮が、713年に唐から冊封を受けて「渤海郡王」に叙せられます。大祚榮はこの機会に、国名を振から渤海に改めています。

私の考えている渤海の領域というのはそんなに広くなくて(図2)、点線で囲んだ範囲が渤海の実効的に支配できている領域だと考えています。ただ、渤海の領域についてはずいぶん異論がありまして、あとから澤本先生がご報告される中では、もっと広い領域をお示しになっていますし、韓国へ行きますと、国立中央博物館のパネルに表示された渤海の地図もかなり広い領域が推定されています。私が点線で示した領域は、渤海の瓦が出ている遺跡の分布範囲です。瓦を葺いた建物がある範囲は、渤海が実効的に支配できていた範囲を示していて、その分布範囲を渤海の中核的な領域と考えています。

698年に渤海が建国された場所は、先ほどご紹介した敦化高原あたりという説が定説になってきましたが、最近の中国の先生達が提起したように私も図們江下流域が渤海建国の場所だと考えています。『新唐書』では、渤海建国の場所を旧国と記しています。まだ多くの研究者は敦化高原が旧国の場所だとお考えなので、これからも論争が続いていくと思います。

いずれにしても、『新唐書』は渤海の最初の拠点には旧国で、次に都が置かれたのは顯州という所だと記しています。顯州は、図們江の流域です(図2)。その後8世紀の後半に王都が顯州から牡丹江流域の上京に遷都し、785年頃に再び図們江流域の吉林省琿春市周辺の東京に都を移します。その後、794年頃に再び上京に遷都をして、926年の滅亡まで上京が渤海の都でした。

2 渤海で出土した帯金具(図3)

さて、皆さんのお手元のレジュメに資料が載っています(図1)。赤丸を置いてある所が、帯金具の出土した渤海遺跡です。帯金具というのは、ベルトに付ける飾り金具です。元々は騎馬民族の装身具で、

馬に乗りながら生活をするので、ベルトからナイフや、色々な物を吊り下げます。そういう吊り下げるための金具が、帯金具のルーツと言われています。唐代に役人の衣服や帯と金具が規定され、その衣服制度が奈良時代の日本に導入され、日本の官人も唐と同じ形状をした金具が伴う帯を身につけています。帯金具には四角形と半円形の二種があり、透穴が下部にあります。この透穴は、先に述べたように本来紐を取り付けてナイフとか色々な物を吊り下げるための穴なのですが、唐や日本ではそういう機能は失われて、形状だけが残っています。

渤海の遺跡からは、約30箇所の遺跡で帯金具が出ています。ただ、帯金具の素材には色々ありまして、銅で作ったもの、鉄で作った帯金具、石で作った石帯と呼んでいるもの、帯金具の表面に色々な花文を伴うものなどがあります。これら以外に、たぶん唐で制作されたものだと思いますが、金製で表面に花文をもつ帯金具も少数ですが出土しています。また、銅製で円形や四角形の透穴を伴ったカルタくらの大きさの帯金具が出土しています。これは渤海を構成する主要民族の靺鞨民族の帯飾りで、渤海が滅びたあとも、その後の金朝や金が滅びた後までずっと残ります。渤海人の帯金具には、唐の衣服令を参考に制作・使用されたものの他に、靺鞨族固有の帯金具があり、帯金具から渤海社会の様相を見ることができます。

(1) 査里巴遺跡(中国吉林省吉林市永吉県)

資料の中で一番古い事例になるんですが、吉林省の査里巴(サリバ)という遺跡から出た資料です。この場所は吉林市の北側に位置し、松花江支流の第二松花江の流域にある遺跡です。川の自然堤防で形成された微高地にあって、現在は畑地になっています。ここから、花柄の文様をもった帯金具が出ています。横幅5cmぐらいある、非常に大きな帯金具です。先ほど岡田さんのお話にもあった、魚々子はかなりしっかりと打ち込んで文様を出しています。

花を横から見たデザインと、花を上から見たデザインの二つです。こういうものと一緒に、さきほどお話しした靺鞨固有の帯金具も出土しています。このお墓は、四角い穴を掘って、その中に木のお棺を入れて、最後に火を着けて燃やして埋めています。仏教の火葬とは違うんですが、北方の靺鞨の人達は、高句麗でもあるんですが、埋葬時に棺や遺体に火をつける着火儀礼が行われていたようです。査里巴遺跡から出土した雲形帯金具と同じ形状の資料は、モンゴル高原にいた契丹族の帯飾りに類例がありますので、この査里巴の帯金具は契丹の影響を受けた帯金具の可能性があると思っています。査里巴遺跡の年代は、8世紀の初め頃と推定しています。

(2) 河南屯古墓 (中国吉林省和竜市)

査里巴遺跡の次に古そうなのが、8世紀の第2四半期だと思いますが、吉林省の図們江の流域にある河南屯という村にある遺跡です。1942年頃に福井県出身の考古学者の齋藤優さんが図們江流域に兵隊で駐屯しておりまして、休日を使って渤海の遺跡を調査し、測量も行なっています。河南屯という村が現在もありますが、齋藤さんが調査した頃には城壁で区画した中に建物基壇のような高まりがありました。測量図には高さ1mぐらいの基壇があって、上に礎石の建物が建っていたことが記録されています。瓦が落ちているので、渤海時代の建物跡だと齋藤さんは紹介しています。ところが1945年に戦争が終わって1949年に中華人民共和国が建国された後、1970年代だったかと思うんですが、地元の方たちがこの高まりを崩して開墾しました。そうしたら金製の帯金具が大量に出てきたということで、役所に届け出て、延辺朝鮮族自治州の博物館の先生や吉林省の先生たちが調査をしました。帯金具は100点以上出ているそうです。これらの金製帯金具は、渤海人が作ったものではなくて、唐から伝わってきたもので、王族以上の人達が身につけるものでしょう。河南屯から出土した帯金具のベースは金で、表

面には剥落してわずかしかなかったようですが宝石か色の綺麗な石がはめ込まれて花形の文様を構成しています。形状は四角以外に花形とか、いろいろな形の金製帯金具が出土しています。

(3) 六頂山墓群 (吉林省敦化市) M5・M14号墓

吉林省の敦化という所、先ほどご紹介した旧国—渤海の建国の場所だと言われている所に、六頂山(りくちょうさん)という山がありまして、そこで渤海の、日本でいうと古墳群ですね、お墓がたくさん見つかっています。その中にM2号墓というのがあります。M2号墓は渤海の3代王大欽茂の次女の貞恵公主が葬られています。発掘調査で墓碑が出土し、貞恵公主が777年に亡くなって780年に葬られた事が判明しています。渤海3代王の次女が葬られた墓があるので、渤海が建国された旧国を敦化とする説が提唱されています。このM2号墓の南にM5号墓があります。M5号墓は、ガラス張りの展示棟の中で石室を見学できる状態になっています。ここから鍍金された金具が出ていて、帯金具として報告されています。真ん中に立体的なデザインで花を横から見た文様が表現されています。M5号墓の横にM14号墓があります。ここから方形の金具に鍍金した帯金具が出土しています。報告書では表面の花文様が斜めになっているんですが、報告書の写真で絵柄を追いかけると、斜めではなくてシンメトリに左右に花びらが伸びるデザインになることがわかりました。これだと忍冬文系の花文帯金具のデザインになります。この資料は忍冬文系の花文帯金具としては、渤海の中で一番古い資料になると思っています。

M5号墓とM14号墓の年代なんですが、M5号墓からは高句麗の影響を色濃く残した軒丸瓦が出ていて、渤海の瓦としては一番古いタイプになります。おそらく建国してから間もない8世紀の前半ぐらいの時期のものだろうと思います。問題は、石室側壁の石の間に、石を安定させるために平瓦を割って挟

み込んでいるんです。M5号墓の後ろにM3号墓がありまして、ここでは方形の基壇を造成して、そこに木棺を2体並行して置いて、上に建物を建てて瓦を葺いています。このM3号墓がおそらく六頂山墓群で一番古い墳墓で、8世紀の初めくらいに作られたと考えています。M3号墓の墓上建物が倒壊して散乱した瓦をM5号墓の造営時に運んで転用したと私は考えています。つまり、M3号墓よりM5号墓の方が新しく、8世紀の半ば頃の造営と考えています。M14号墓はM5号墓と同時期かやや後の造営だと思っています。

(4) 竜頭山墓群竜海墓区 (吉林省和竜市)

M13・14号墓

次に、六頂山墓群からずっと南の、図們江の下流にまた戻ります。先ほどご紹介した河南屯という村に近い所に竜頭山墓群という墳墓群がありまして、その中の竜海墓区で調査された資料を紹介します。竜海墓区のM1号墓は、墓室の入り口に墓碑が置かれていて、三代王大欽茂の四女で、六頂山に葬られた貞恵公主の妹の貞孝公主が792年に亡くなって葬られたことが判明しています。

尾根筋に墳墓がたくさんありまして、尾根裾の谷間に基壇状の高まりがありました。畑の中央が基壇状に盛り上がっていて、発掘前は寺院跡と考えられていました。ところが発掘調査の結果、方形基壇の中央に二基の墓坑があり、その周囲に礎石が検出されて墓上建物を伴う墳墓であることが明らかになりました。基壇上には外陣と内陣で構成された建物があって、内陣の床面で二基の墓坑が検出されています。墓坑から副葬品として、玉製で表面に木の葉をデザインした方形帯飾が出土しています。このほか、金銅製で羽状の金属製品が出土していて、冠だと推定しています。羽状の表裏に花柄の文様があります(図5 A2型左)。これらの副葬品から、渤海の王族クラスの墓だろうと推定しています。

(5) 虹鱒漁場墓群 (黒龍江省牡丹江市)

次は、ふたたび牡丹江流域に北上して、冒頭にご紹介した渤海王都の上京から2kmぐらい北西に離れた所にある墳墓群を紹介します。虹鱒養魚場に隣接する微高地にあるので、遺跡の名前が虹鱒漁場墓群とされています。ここは300基ぐらいの墳墓がありまして、黒龍江省の先生方たちが発掘調査をして、大部な報告書が出ています。会場にいらっしゃる鈴木靖民先生や李成市先生と一緒に、1992年でしたか、発掘現場を見せていただいた、思い出のある所です。

この墳墓群はほとんどが横穴式石室なんですが、FTとよばれる墳墓群の西側あたりだけ、石を方形に並べた上に棺を置いている、敷石墓と呼んでいる埋葬施設が発掘されています。そこからやはり花文をもった帯飾りが出土しています。楕円形の板に足金物が付いて、ベルトに着けるものです。金メッキしています。この墓群では石室から、唐や日本と同じような官人が装着した銅製帯金具がたくさん出土しています。また、先ほどご紹介した鞅鞬固有の板状帯飾りも出土しています。唐の衣服制に倣って渤海の官人が身につけたと思われる帯金具と、鞅鞬の伝統的な板状帯金具が一緒に出てくるということは、渤海の文化複合、二重構造を考える上で興味深い現象です。

1992年に鈴木先生たちと見学した時は、石室の中に人骨が、たぶん3人ぐらいは埋葬されている様子を見ることができました。追葬されているんだと思うのですが、多人葬墓ですね、一つのお墓にたくさんの人が埋葬されていました。現地は周りから4~5m高くなった微高地で、その上に多くの墳墓が造営されていました。

(6) 渤海上京城 (黒龍江省牡丹江市)

上京城の平面図を見ると、南から順番に1号、2号、3号、4号、5号という5つの宮殿が南北に並んでいまして、5号宮殿という一番北の宮殿跡から

花文を伴う金具が出ています。渤海上京は、1930年代に東京大学を中心とする東亜考古学会が発掘調査をしています。2000年代に入ってから黒龍江省の研究所の先生たちが大規模な発掘調査をして、整備が進められています。2009年に刊行された発掘調査報告書に帯金具として報告された金具があります。足金物が極端に長いので、帯金具以外の装飾金具なのかもしれないのですが、ここでは報告書にしたがって帯金具としておきます。金具表面に花を横から見た文様があって、上部に傘状の文様があります。周りには唐草文が置かれていて、基本的には忍冬文を表現した花文帯金具のデザインと同じものがレリーフで表現されています。また、2号宮殿から表面に花をデザインした家具の飾金具が出土しています。文様は花を上から見たものと、横から見たものがセットになっています。2号宮殿からは銅製の普通の帯金具と一緒に鉄製の帯金具も出ています。銅の帯金具と鉄の帯金具を着ける官人で、何かランク別けがあるのかとも考えたくはなるのですが、ここでは宮殿の中から一緒に出てきているので、どの程度ランク差があったのかはまだわかりません。これらの帯金具は、第二次上京（794～926年）もしくは渤海滅亡後に置かれた東丹国（とうたんこく・10世紀第二四半期）の遺物です。

(7) クラスキノ城跡（ロシア沿海地方ハサン区）

ロシアの沿海地方の、図們江の河口に近い所にボシエツ湾があります。その湾の一番奥にクラスキノという村があって、そこに大きな平地城があります。この平地城が渤海と日本を結ぶ船の出発地を管理する場所で、渤海の塩州という州の州城だったと考えられています。ここから帯金具がいくつか出土しています。これは四角い帯金具で、真ん中に花を上から見たデザインが彫り込まれています。それからこれはベルトの一番端の金具で、花文と唐草文があります。このほかに、花を上から見た線刻文のある指輪や、四角い帯金具に削りが入って上端が

ちょっと飛び出す変わった形の、契丹の典型的な帯金具も出土しています。契丹系の帯金具がクラスキノ城跡で出土していることの意味を考える必要があります。それから石帯（せきたい）—石の帯飾りも出土しています。日本でも平安時代に入ると、黒い石で作った帯飾りが出土します。これがクラスキノ城跡で出土した時に、日本との交流が考えられる遺跡なので、「やっと日本から持ってきた遺物が出てきた」と思って喜んだのですが、石帯の透穴の開け方を観察すると、日本の石帯とは違う穿孔方法でした。日本製の石帯は回転穿孔一回で透穴をあけているのですが、クラスキノ城跡の石帯は回転穿孔を二回おこなって透穴をあけていました。このことから、残念ですが日本製の石帯では無く大陸で制作された石帯だと判断しました。

2019年に、青山学院大学の岩井先生が主催するクラスキノ城跡調査に参加させていただきました。城壁の東側の部分を調査していると、帯金具（丸軛）が出てきました。これを雨の日にクリーニングさせてもらいましたが、何か文様があるんです。多分花柄の文様なんです。木綿針を借りて砂粒を一つずつプチプチやっても砂が銅鑄にこびり付いていて、なかなか取れないですね。私は根気がないので途中でイヤになりまして（笑）、あとはロシア人にバトンタッチしました。だから現在どうなっているか、もうちょっと綺麗になっているんじゃないかなと思います。

クラスキノ城では、非常に面白い遺物が出土しています。ラクダ形のペンダントです。



クラスキノ城のラクダ形ペンダント（小嶋芳孝氏撮影）

大きさ横幅2cm くらいの小さなもので、フタコブラクダです。モンゴル高原にいるラクダなので、モンゴルからラクダの隊商が、日本海に面したクラスキノまで来ていたということがわかる資料です。実際にラクダの足の骨が、クラスキノ城から出土しています。先ほどご紹介した契丹系帯金具の他に井戸から契丹系の壺が出ていますので、9世紀の終わりから10世紀の初め頃に契丹との交流がかなりあったということがわかります。

渤海が926年に滅亡したあと、契丹の皇帝の耶律阿保機（やりつあほき）が東丹国を置き、自分の息子を東丹国王にしています。東丹国時代だと思われるシニエスカイという遺跡から、帯金具が出ています。その形は唐の時代から続いている帯金具の形ですが、表面に花柄の文様が付いています。それから、契丹の雲形の帯金具が出ています。同時に唐から続いている無文の四角い帯金具（巡方）と半円形の帯金具（丸軛）も出土していて、東丹国は渤海時代の諸制度に契丹的な様相が加わった姿だったということがわかります。

これまでお話しした事を整理すると、8世紀の初頭前後に査里巴遺跡で契丹系の帯金具が出土し、8世紀の第2四半期には河南屯古墓で唐の王族が使う金製帯金具が出土しています。8世紀の中頃には六頂山墓群の14号墓から金製の帯金具が出土しています。14号墓の帯金具も、ひょっとしたら唐から持ってきたものかもしれません。8世紀の後半には竜頭山竜海墓区13・14号墓の玉の帯飾りがあって、これも唐で作られた帯飾りだと考えています。8世紀の後半には虹鱒漁場墓群FT1出土品があって、渤海の上京の5号宮殿出土の帯飾りは9世紀代、クラスキノ城跡の帯飾りは9世紀後半から10世紀初頭頃だと考えています。

3 穴太遺跡と畝田ナベタ遺跡・鳥羽遺跡の帯金具

畝田ナベタ遺跡と穴太遺跡の帯金具に戻って話を

しますが、ナベタ遺跡の帯金具の花柄の文様の類例は、今ご紹介したように渤海の帯金具に少しはあります。以前に渤海の花文帯金具を検討したとき、韓国の龍潭洞遺跡から出土した帯金具と同じ文様の帯金具の事例を渤海の出土資料から見いだすことが出来ませんでした（図5）。ただし、唐や契丹の帯金具にも龍潭洞遺跡と同じ文様の帯金具の事例が見当たらないことと、龍潭洞遺跡の年代が新羅末から高麗初期の10世紀前後ということなので、渤海末期の帯金具の可能性を考えていました。昨年、穴太遺跡から出土した帯金具が龍潭洞遺跡の帯金具と共通する文様だったので大変驚きました。そこで、龍潭洞遺跡と穴太遺跡から出土した帯金具の文様について、再度検討しました。斎東方先生（中国）の『唐代金銀器研究』という本の中に、唐のいろいろな金具のデザインがたくさん載っています（図4）。それを見ていきますと738年の資料で、畝田ナベタ遺跡の花文帯金具と共通する花を横から見た文様がありました（A）。それから733年の資料（B）では、上方で左右に大きく開いた葉と思われる表現があり、下方端に花が置かれています。茎の左右に鳥が嘴でつついているのが表現されています。この文様は、上下逆さまに配置されています。穴太遺跡と龍潭洞遺跡の帯金具の中央の文様は、上端に左右に開く葉があり下端に花が置かれていて、資料（B）に提示した733年の西安・書美美墓から出土した貝を模した鍍金容器の表面に描かれた花文と共通する文様です。つまり、穴太遺跡と龍潭洞遺跡の帯金具にある花文は、唐代の8世紀初めにはすでに成立していたことがわかりました。

契丹の帯金具にある花文の中で、941年に没した東丹国宰相の耶律羽之（やりつうし）墓出土の資料（図7）が穴太遺跡や龍潭洞遺跡の花文の系譜にある資料だと考えています。耶律羽之墓の花文金具にあるB型花文は、上下両端に花があって真ん中に花文や葉っぱを配しています。この資料はかなりデフォルメされていますが、龍潭洞や穴太遺跡の帯金

具の花文と同じ系譜にあるのだろうと思っています。文様形状からみると、穴太遺跡や龍潭洞遺跡の花文は、耶律羽之墓の花文より原形を保っていて古相を示しており、このことから穴太遺跡と龍潭洞遺跡の帯金具は10世紀以前、渤海の帯金具と判断できると考えています。

また、花を横から見た花文帯金具は契丹にも見ることができ、その分布範囲は西へ分布が広がっていき、一番西はドニエプル川の左岸で出土しています。今ウクライナとロシアが戦争していると真ん中です。あのあたりまでなんと契丹系の花文帯金具が、文様を変化しながら広がっています。

花文を横から見たナベタ遺跡の帯金具(図6上)ですが、田中広明先生もご研究の鳥羽遺跡の資料(図6下)と、ほとんど一緒です。ナベタ遺跡の資料は、中のくぼんだ所に漆をおいているんですね。鳥羽遺跡も中に黒いのが少し何箇所か残っていて、田中先生によると漆じゃないかということです。それで、渤海に漆があったかという問題なんです。実は先ほどご紹介した虹鱒漁場遺跡から漆椀が出ていました。ということで、ナベタ遺跡の漆をおいたのも、鳥羽遺跡の漆をおいたのも、渤海人の可能性が高いと私は考えています。

4 穴太遺跡と龍潭洞遺跡の帯金具

龍潭洞遺跡の帯金具ですが、穴太遺跡の帯金具と同じデザインだと岡田さんが話をされました。出土

した土器が龍潭洞遺跡の年代を決める根拠になっていますが、新羅の終わりから高麗の初めと聞いています。一緒に勾玉とかガラス玉、水晶玉が出ています。それから普通の帯金具も出土し、花文帯金具が出ています(岡田講演図8)。また重要な遺物に、中国の江南(浙江省周辺)にある越州窯という窯で焼いた壺の破片が出土しています。越州窯の陶磁器を濟州島に持ってきている。しかも祭祀遺物も一緒に出ているということで、龍潭洞遺跡は海上交易に関わる神祀りをした遺跡だろうと考えています。

渤海から唐へ、9世紀の終わりになると交易船が派遣されています。唐に向かった渤海船が遭難して薩摩の甌島に漂着した事例が、『続日本紀』875年に記されています。渤海船が朝鮮半島沿いに南下して対馬の横を通り江南に向かう途中で濟州島に寄港して、神祀りが行われたのではないかと考えています。

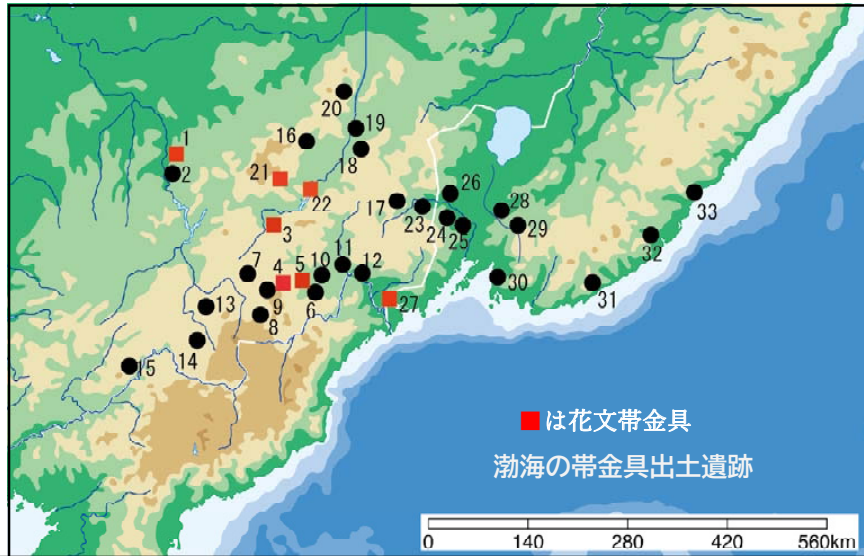
ロシアの沿海地方では、クラスキノ城跡やアプリコソバヤ寺院と呼んでいる渤海の寺院などから、越州窯の磁器が出土しています。10世紀初頭前後に龍潭洞遺跡で、渤海人=異界の人たちが来航したことに伴う神祀りを濟州島の人々がおこない、新羅末期の土器や勾玉、ガラス玉などと共に渤海製の帯金具を供献したのではないかと考えています。

時間が来ましたので、言いたいことはこの資料の最初に書いていますのでご覧ください。討論の時に、またお話をしたいと思います⁽¹⁾。

(1) 本研究はJSPS科研費JP20K01096の助成を受けたものです。

《参考文献》

1. 尹郁山「吉林永吉県査里巴村發現二座渤海墓」『考古』1990年6期
吉林省文物考古研究所「吉林永吉査里巴靺鞨墓地」『文物』1995年9期
2. 吉林市博物館「吉林永吉楊屯大海猛遺址」『考古學集刊5』中国社会科学出版社1987年
吉林市博物館「吉林永吉楊屯遺址第三次發掘」『考古學集刊』7 科学出版社1991年
3. 王承礼「敦化六頂山渤海墓清理發掘記」社会科学戰線1979年3期
吉林省文物考古研究所『六頂山渤海墓葬』文物出版社2012年
4. 郭文魁「和竜渤海古墓出土の几件金飾」文物1973年第8期
5. 吉林省文物考古研究所「吉林和龍市渤海王室墓葬發掘簡報」『考古』2009年6期
6. 中国国家文物局主編『中国文物地圖冊・吉林分冊』中国地圖出版社1993年
7. 延辺博物館「東清渤海墓葬發掘報告」・鄭永振、嚴長祿『渤海墓葬研究』吉林人民出版社2000年、何明「吉林和竜高産渤海寺廟址」北方文物1985年4期
9. 延辺朝鮮族自治州博物館「和竜北大墓葬清理簡報」『東北考古与歴史』1982年
10. 中国国家文物局主編『中国文物地圖冊・吉林分冊』中国地圖出版社1993年
11. 魏存成『渤海考古』文物出版社2008年
12. 斎藤優『半拉城と他の史蹟』半拉城史刊行会1978年
13. 王健群・李健才 他「撫松県前甸子渤海墓清理簡報」『博物館研究』1983年3期
14. 吉林省文物考古研究所「吉林渾江永安遺址發掘報告」『考古學報』2期1997年
15. 王飛峰「吉林集安東台子遺址研究」『北方文物』3期2016年
16. 李硯鉄「海林北站征集の几件渤海時期文物」『北方文物』1999年第2期、北方文物雜誌社
17. 黒竜江省文物考古研究所「黒竜江東寧県小地営遺址渤海房址」『考古』2003年第3期
18. 趙虹光「黒竜江省牡丹江樺林石場溝墓地」北方文物1991年4期 北方文物雜誌社
19. 黒竜江省文物考古研究所「黒竜江省海林市羊草溝墓地的發掘」『北方文物』1998年3期
20. 黒竜江省文物考古研究所「1996年海林細鱗河遺址發掘的主要収獲」『北方文物』1997年4期
21. 黒竜江省文物考古研究所『寧安虹鱗魚場』文物出版社2009年
22. 黒竜江省文物考古研究所『渤海上京城』文物出版社2009年
23. 張泰湘「唐代渤海率濱府弁」『歴史地理』1983年2輯
24. 吉林省文物考古研究所・ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所編、宋玉彬・A.Ivliev 他『俄羅斯濱海辺疆区－渤海文物集粹』文物出版社2013年
25. 大韓民国文化財庁・韓国伝統文化大学、ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所・国立極東工科大学『沿海州チエルニャチノ2遺跡發掘調査報告Ⅱ』2009年
26. 韓国伝統文化大学、ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所『沿海地方とコンスタンチノフカ1集落遺跡における渤海遺跡』2010年
27. 吉林省文物考古研究所・ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所編、宋玉彬・A.Ivliev 他『俄羅斯濱海辺疆区－渤海文物集粹』文物出版社2013年
28. 吉林省文物考古研究所・ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所編、宋玉彬・A.Ivliev 他『俄羅斯濱海辺疆区－渤海文物集粹』文物出版社2013年
29. 吉林省文物考古研究所・ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所編、宋玉彬・A.Ivliev 他『俄羅斯濱海辺疆区－渤海文物集粹』文物出版社2013年
30. 吉林省文物考古研究所・ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所編、宋玉彬・A.Ivliev 他『俄羅斯濱海辺疆区－渤海文物集粹』文物出版社2013年
31. Y.G. ニキーチン、中山由美、小嶋芳孝「グラズコフカ1遺跡出土の錫製品について」
『石川県埋蔵文化財情報第7号』（財）石川県埋蔵文化財センター2002年
32. O・B・ジャーコヴァ、B・И・ジャーコフ、天野哲也訳「靺鞨の墓地 マナストゥィールカ3遺跡」『古代文化47-3』
古代学協会1995年
33. 吉林省文物考古研究所・ロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所編、宋玉彬・A.Ivliev 他『俄羅斯濱海辺疆区－渤海文物集粹』文物出版社2013年



番号	国名	遺跡名	所在地	唐系帯金具				楕円	雲形	燕尾	鞞	その他
				銅	金銅	鉄	石					
1	中国	査里巴遺跡	吉林省永吉県	○					●		○	
2	中国	大海猛遺跡	吉林省永吉県	○								○
4	中国	河南屯古墳	吉林省和竜市		●			●				
3	中国	六頂山墓群	吉林省敦化市	○	●	○						○
5	中国	竜頭山竜海墓群14号墓	吉林省和竜市				●					
6	中国	恵章墓群	吉林省和竜市									○
7	中国	東清墓群	吉林省安図県	○			○					○
8	中国	和竜高産渤海寺廟址	吉林省和竜市				○					
9	中国	北大墓群	吉林省和竜市	○			○					
10	中国	英城墓群	吉林省竜井県				○					
11	中国	涼水果園	吉林省図們市	○								
12	中国	密江墓群	吉林省琿春市	○								
13	中国	前甸子渤海墓	吉林省白山市		○							
14	中国	永安遺跡	吉林省白山市	○								○
15	中国	東台子遺跡	吉林省集安市									○
16	中国	海林北站墓群	黒竜江省海林市									○
17	中国	小地堂子遺跡	黒竜江省東寧県									○
18	中国	石場溝墓地	黒竜江省牡丹江市									○
19	中国	羊草溝墓地	黒竜江省海林市	○	○							
20	中国	細鱗河遺址	黒竜江省海林市	○								○
21	中国	虹鱒養魚場墓群	黒竜江省牡丹江市	○	○	○		●	○			○
22	中国	上京	黒竜江省牡丹江市	○		○		○				●?
23	中国	大城子古城	黒竜江省東寧県	○								
24	ロシア	チエルニャチノ5遺跡	沿海地方	○								○
25	ロシア	チエルニャチノ2遺跡	沿海地方			○						
26	ロシア	コンスタンチノフカ1遺跡	沿海地方	○								○
27	ロシア	クラスキノ城跡	沿海地方	○●	○	○	○			○		
28	ロシア	ゴルバトカ城跡	沿海地方	○								
29	ロシア	ニコラエフカII遺跡	沿海地方	○			○			○		
30	ロシア	ペトロフカ墓地	沿海地方	○								
31	ロシア	グラズコフカ遺跡	沿海地方	○								
32	ロシア	シニエスカリイ遺跡	沿海地方	●					○			○
33	ロシア	マナストウィルカ3遺跡	沿海地方	○								

図1 帯金具出土遺跡の分布図と一覧表

- ・旧国：図們江下流域
～敦化
- ・742～756年：顯州
に王都(吉林省和竜市)
- ・756年頃：上京遷都
(黒竜江省牡丹江市)
- ・785年頃：東京遷都
(八連城・吉林省琿春市)
- ・795年頃：上京遷都
→926年滅亡

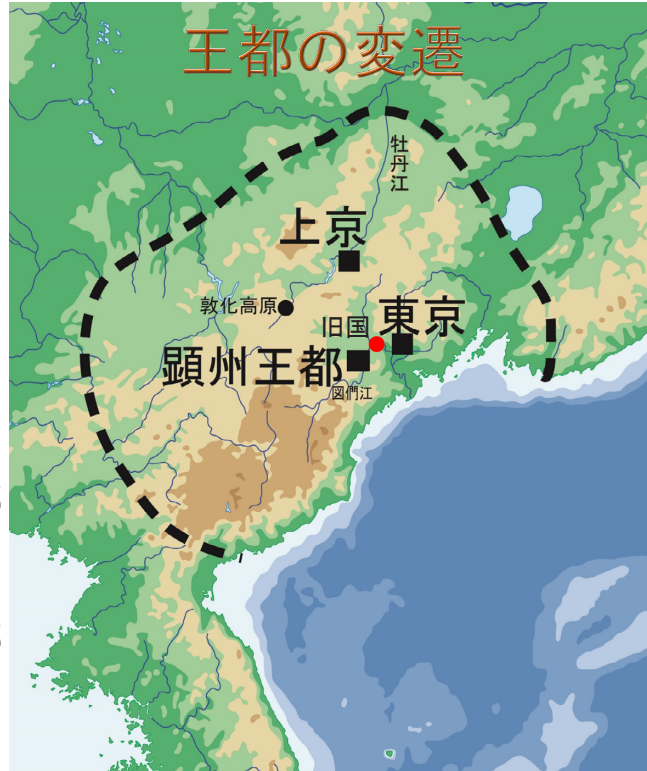


図2 渤海の領域と王都の変遷

<p>・ 查里巴遺跡19号墓：8世紀初頭前後 (参考文献 1)</p>	
<p>・ 河南屯古墓 (8世紀第II四半期) (参考文献 4)</p>	
<p>・ 六頂山墓群5号墓・14号墓 (8世紀中頃)</p>	
<p>・ 竜頭山竜海墓区13・14号墓 (8世紀後半) (参考文献 3)</p>	
<p>・ 虹鱒漁場墓群FT1 (8世紀後半～9世紀) (参考文献 21)</p>	
<p>・ 上京城5号宮殿 (9世紀) (参考文献 22)</p>	
<p>・ クラスキノ城跡 (9世紀後半～10世紀) (参考文献 24)</p>	

図3 渤海の花文帯金具の形状と年代観



図4 唐代花文の事例



図5 渤海帯金具の文様分類

A2型: 渤海では8世紀後半～9世紀代

・ 畝田ナベタ遺跡

- ・ 黒漆: 銅地金に漆で金板を貼り、さらに花文の凹部に黒漆を充?
- ・ 渤海の漆芸: クラスキノ城跡で漆パレット、虹鱒漁場墓群から漆器?
- ・ 畝田ナベタ遺跡の出土状況: 9世紀中頃の掘立柱建物付近

・ 鳥羽遺跡

- ・ 銅地金に金板(鍍金?)の上に黒漆か
- ・ 遺跡: 国府関連遺跡・神社跡



図6 畝田ナベタ遺跡・鳥羽遺跡の花文帯金具
(上: 石川県埋蔵文化財センター保管 下: 群馬県蔵 / 小嶋芳孝氏撮影)

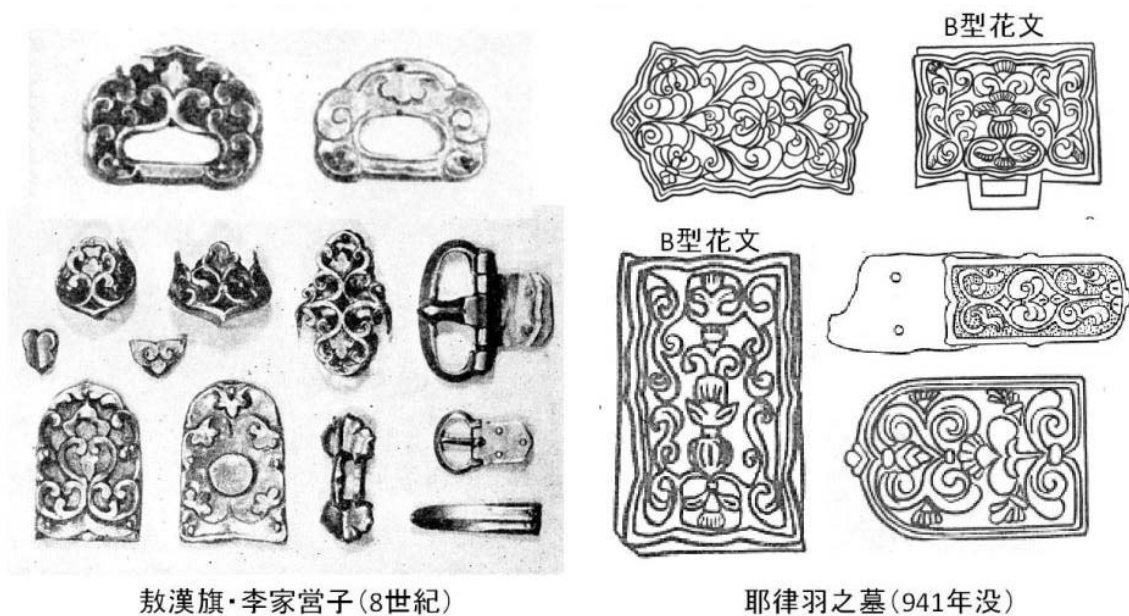


図7 遼(契丹)の花文帯金具

横浜ユーラシア文化館紀要 第12号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 12

2024年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館
〒231-0021 横浜市中区日本大通12
Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453
www.eurasia.city.yokohama.jp/
発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
印刷制作 TAKT-JAPAN株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures
12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan
Published by the Yokohama Historical Foundation
Printed in Japan by TAKT-JAPAN, CO., LTD

ISSN 2758-6332